

タ農民の反佛闘争における表現形態を考えようとするものである。

中國國民黨左派研究の意義

山 田 辰 雄

中國現代史は、結果から見れば、國共兩黨の對立に分極化し、共產黨の勝利に歸結した。このような背景のなかで、從來の中國現代史の研究は共產黨の勝利を跡づけることに焦點をあててきた。國共兩黨、とくに共產黨の果たした役割の重要性を考慮すれば、このような關心のあり方は理解できないことではない。

しかし、黨派性をもたない大部分の中國人民に提示された政治的選択は、國共兩黨の間に横たわる多様な政治勢力のなかにあった。彼らの選擇がなぜ國共兩黨に收斂していったのかが問われなければならぬであろう。そのためには、共產黨の分析だけでは不十分である。私の問題意識は、中國現代史に登場する多様な政治勢力の相互關係を分析することによって、中共中心の現代史を再構築することである。そうすることによって初めて共產黨の果たした役割が正しく評價される。したがって、そのような中國現代史は、共產黨史研究を排除するものではなく、共產黨史研究の一定の成果を前提とするものである。

私の國民黨左派研究は、以上に述べた中國現代史再構築の試みの一部分をなす。今回は、左派のもっている諸問題を、(一)黨内におけ

る組織上の地位、(二)孫文思想との關連、(三)中間勢力としての左派の立場、(四)左派の現代的意義の四點から論じてみたいと思う。

『與猶堂全書』に見える李朝後期の計量單位

——李朝の課稅單位「結」負々制についての

丁若鏞（一七六二—一八三六）の理解——

山 内 正 博

題記の全書には隨處に矛盾にみちた當時の計量單位の實態が指摘され、十進法によるそれらの統一的體系への改革が主張されるが、なかでも特に注目されるのは、田土の廣狹と生産性の高低を組みあわせて一定の課稅單位とした獨自の結—負制に對するそれである。長さ（度）、かさ（量）、重さ（衡）に較べて實態として掴み難い廣さ（畝）について、李朝では布種量（斗）、耕作量（日）と共に本來的には收穫量である結—負—束—把が量の概略を示す單位として一般に使用された。

土地の生産性にかかわりなく結あたり一定額の穀物を徵收できるこの結—負制は課稅單位としては確かに便利であったが、他方それぞれの境界の畫定や生産性の認知に問題があり、また二十年に一度の量田も久しく行われなかったことから現實には矛盾が山積した。

これらの矛盾を解決する方策としてまず頃—畝制によって田土の境界を畫定せよとする與猶堂の主張にはそれなりの根拠があったが、それは元老宿徳によって拒否された。祖法を輕々に變更できな

いというのが拒否の理由であったが、與猶堂の側にも運用面の矛盾をそのまま祖法そのものの矛盾に短絡させている面がないわけではなく、それが逆に元老宿徳に自信をもたせる結果になったともいえる。

結—負制は李朝五百年に留まらず實は羅麗以來の朝鮮半島における土地制度の大綱であり、それだけに與猶堂の主張に對する壁は厚かったが、それは高宗朝及びそれ以後の外國の支配の時代に改めて問われることになる。

フラグ・ウルスの國制

——イスラム國家論に向けて——

本 田 實 信

西曆一二五八年フラグ・ハンはバグダードを攻略し、「信徒の長」のカリフ・ムスターシムを處刑してアッバース朝を滅ぼすと、イル・ハンの稱號を採り、西アジアの地に新しいモンゴル政權を樹立した。この政權は當時のペルシア語史料ではフラグ・ウルスと呼ばれている。ウルス (ulus) とはモンゴル語で「民、國」を意味する。フラグ・ウルスとは直譯すれば「フラグ國」である。ではこのフラグ・ウルス (一二五八—一三三六) とはどのような國であつたのか、いかなる國家構造を有つていたのであろうか。

フラグ・ウルスでは當初モンゴル至上主義を採用し、チンギス・ハンの法が最高の統治原理であり、イスラム教徒にコブチュルとい

う人頭税を課したが、一三世紀末年第七代イル・ハンのガザン・ハンは自らイスラムに改宗し、諸々の改革を斷行してフラグ・ウルスのイスラム國家としての再編成を企てた。

ガザン・ハン以後のフラグ・ウルスの統治機構を究明する絶好のペルシア語史料として、ムハンマド・ナフチェヴァーニーの『書記規範』(Dastur al-Katib) という文書集がある。「書記の太陽」と呼ばれたナフチェヴァーニー編纂の本書が完成したのは一三六六年であり、彼はこれをジャライル朝のスルタン・ウヴァイスに獻呈した。この『書記規範』に收められている任命書の分析により、先ず政權基盤の軍事を擔うモンゴル部族、財政の任に當るイラン官僚、一般人民の生活を指導するイスラム聖職者、この三つの支配層がモンゴルのハンの權威のもとに、「國家」機構の中に組みこまれたことを指摘したい。次にここから得られるフラグ・ウルスの「國家」像を、以前のセルジューク朝スルタンの「國家」、以後のサファヴィー朝シャアの「國家」と比較してみたい。